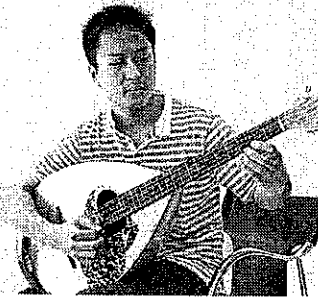


マンドリン

「協奏」で磨いた協調性

重低音と甘美な音色の不思議なハーモニーが魅力のマンドリンチェロ。八本の弦で音を奏でるこの楽器を知る人は少ないが、パステルラボ（金沢市）の網沢辰也さん（27）にとっては、かけがえのない親友だ。



金沢大学に入学した一九九七年春、キャンパスでふと耳にした「金沢大学マンドリンクラブ」の演奏。中学時代からアコースティックギターを弾いてきたが、クラシックからポップスまで幅広い表現ができるマンドリ

ンチェロに一目惚れした。

クラブでは指揮者も任せられ、演奏のスタンスを巡ってほかの部員と対立したことも。しかし「みんながこう弾きたいという音楽を引き出すこと」がいかに大事かを痛感した。音楽全体を統括する指揮者と音楽を紡ぐ奏者。異なる立場での経験は「仕事にもプラスになっている」。

今の会社に転職してからは、忙しくて練習機会が減ったが、仕事の傍ら金沢のマンドリンサークルで年に一回の定期演奏会、福井、富山のマンドリンサークルとの合同演奏会、福祉施設での出張演奏などをこなす。

「音楽を通じて高齢者や障害者が第二の人生に積極的にチャレンジできる場をつくりたい」。マンドリンに導かれ、人生でも自分の音色を奏でたいという思いは日増しに高まっている。

日本経済新聞

2006年(平成18年)9月3日(日曜日)